

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	海外における看護学生への看護倫理教育に関する研究の動向：倫理的に行為する能力の獲得に焦点をあてた考察
別タイトル	Research trend in nursing ethics education for nursing students in other countries : A study focusing on acquiring the ability to engage in ethical practice
作成者（著者）	鈴木, 俊美
公開者	FD委員会 健康科学ジャーナル編集会(東邦大学健康科学部)
発行日	2020.03.31
ISSN	24343838
掲載情報	東邦大学健康科学ジャーナル. 3. p.27 41.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	報告
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohohsj.3.27
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD20892924

海外における看護学生への看護倫理教育に関する研究の動向

—倫理的に行為する能力の獲得に焦点をあてた考察—

鈴木 俊美

目的：海外における看護学生への看護倫理教育に関する研究の動向を明らかにし、倫理的に行為する能力の獲得に向け、日本における看護学生への看護倫理教育において、どのように活用できる可能性があるのか示唆を得る。方法：CINAHL with Full text(web版)を使用し、2013年～2017年の過去5年間に発表された論文の中から、「ethics education」「nursing」「under graduate」の全ワードを含む論文を検索した。結果：17本の論文が抽出された。研究目的別に分類すると、①看護学生および看護教員の看護倫理教育に関する現状認識の研究、②倫理的思考能力を育成するための倫理的議論に焦点をあてた研究、③臨床実習に関する看護学生と臨床指導者の経験に焦点をあてた研究、④倫理的問題に直面した看護学生の対応を明らかにする研究、⑤ICT(情報通信技術)を取り入れた看護倫理教育の開発・実施・効果の検証に関する研究、⑥看護倫理教育の効果を測定するツールの開発に関する研究、⑦外的要因が看護学生の道徳的感受性や倫理的行動に及ぼす影響に関する研究、など7つの分野に分類できた。倫理的に行為する能力の獲得に関連する研究は2本であった。

キーワード 倫理教育 看護 学士課程 看護倫理 文献検討

1. 序文

日本における看護倫理教育は、1951年、保健婦・助産婦・看護婦学校養成所指定規則に独立して位置付けられ、一般教育科目にも倫理学が取り入れられていた(小島, 1998)。しかし、単に看護婦の礼儀作法や処世術を教えているにすぎないのではないかとという批判が時代の流れと共に生じ、1967年、指定規則の改正が行われた新カリキュラムでは、「看護学総論の中に看護史および看護倫理を含む」となり、独立した科目としては姿を消した(小島, 1998)。

その後、インフォームド・コンセント、脳死問題、患者の権利等が社会問題として浮上し始めたことに伴い、倫理教育の必要性が問われ、2007年「看護基礎教育に関する検討会報告書」において、職業に必要な倫理観の育成の必要性が述べられた。橋本ら(2008)は、2003年「看護者の倫理綱領」改訂に伴い、看護師の「看護倫理」への関心が高まり「看護倫理」に関する論文が増加したと述べている。看護基礎教育における看護倫理教育に関する論文も増加する中、鈴木(2015)は、学生の倫理意識に関する研究はまだ断片的であり、学生の価値が多様化している現在、多方面からの調査の必要性があると述

べている。吉岡(2016)は、Gallagher(2006, 2008)の示す倫理的能力の5つの構成要素、すなわち「知ること」「見ること」「振り返ること」「行うこと」「あること」を用いて、学生の倫理的能力に関する教育の現状と課題に関する文献検討を行っている。その結果、「知ること」「見ること」「振り返ること」に関しては様々な研究がなされているが、倫理的に行為する能力である「行うこと」や倫理的な特質あるいは性質を示す「あること」に分類される研究は少なかったことが示されている。この結果をふまえて国内の先行研究をみると、倫理的に行為する能力の獲得に関する研究は、臨床で働く看護師を対象とするものがほとんどであり、看護学生が倫理的に行為する能力の獲得に焦点をあてた研究は見あたらない。そこで、海外に目を向け、倫理的に行為する能力の獲得に関する研究が行われていないか調査し、日本の看護倫理教育に取り入れられる可能性はないか検討することにした。

以上より、本研究では海外における看護倫理教育に関する研究の動向を調査し、どのような研究がなされているのか現状を明らかにし、倫理的に行為する能力の獲得に向け、日本にお

る看護学生への看護倫理教育において、どのように活用できる可能性があるのか示唆を得ることを目的とした。

II. 方法

研究対象は、CINAHL with Full text(web版)を使用し、2013年～2017年の過去5年間に発表された論文の中から、「ethics education」「nursing」「under graduate」の全ワードを含む論文を検索した。その結果38本の論文が抽出された。抄録を読み、研究論文ではないもの、研究目的が看護学生の倫理教育に関するものではないもの、本文が取り寄せできなかったものを除外し、合計17本の論文を研究対象とした。

分析は、発行年、筆頭著者、筆頭著者の在住する国、研究目的、研究デザイン、研究対象、データ収集方法、分析方法、出典、結果、結論の項目に整理した一覧表を作成したのち、研究目的別に分類した。本文を精読し、研究目的とその結果から、海外における看護倫理教育に関する研究の動向と倫理的に行う能力の獲得に関連した論文に焦点を絞り、日本の看護倫理教育にどのように活用できる可能性があるのか検討した。和訳は、専門家にアドバイスをすることで信頼性を確保した。また、引用する際は出典を明示し、孫引きにならないよう原典に戻って確認するなどの倫理的配慮を行った。

III. 結果

1. 各年代の論文数と国の内訳

抽出された論文の筆頭著者の在住する国は、アメリカ、オーストラリア、韓国、ブラジル、ベルギー、ニュージーランド、スウェーデン、台湾の合計8か国であった(Table1)。

2. 分析対象論文の内訳

17本の分析対象論文の一覧表をTable2に示した。

研究対象者は看護学士課程の看護学生の場合と、看護教員のみ、看護学生と臨床指導者、看護学生と元看護師などであった。

研究方法は、実験研究、準実験研究、量的研究、質的研究、ミックス・メソッド・リサーチ、文献レビューなどであった。

出典は専門誌、大学紀要などがみられた。

Table 1 各年代の論文数と国の内訳

発行年	論文数	国(論文数)
2013	3	アメリカ (1)
		オーストラリア (1)
		韓国 (1)
2014	5	アメリカ (1)
		韓国 (2)
		ブラジル (1)
		ベルギー (1)
2015	2	韓国 (1)
		ベルギー (1)
2016	3	ニュージーランド (1)
		アメリカ (1)
		スウェーデン (1)
2017	4	スウェーデン (1)
		アメリカ (1)
		韓国 (1)
合計	17	8か国 (17)

3. 研究目的別の分類

17論文を研究目的別に分類すると、①看護学生および看護教員の看護倫理教育に関する現状認識の研究、②倫理的思考能力を育成するための倫理的議論に焦点をあてた研究、③臨床実習に関する看護学生と臨床指導者の経験に焦点をあてた研究、④倫理的問題に直面した看護学生の対応を明らかにする研究、⑤ICT(Information and Communication Technology: 情報通信技術のこと。以下ICTと略す)を取り入れた看護倫理教育の開発・実施・効果の検証に関する研究、⑥看護倫理教育の効果を測定するツールの開発に関する研究、⑦外的要因が看護学生の道徳的感受性や倫理的行動に及ぼす影響に関する研究

Table 2 分析対象論文一覧

国	文献NO	筆頭著者(発行年)	研究タイトル(和訳)	研究デザイン(デザイン分類)	研究対象	データ収集方法	分析方法
韓国	1	MI-Aie Lee (2013)	看護学生の道徳的判断の変化と倫理教育の効果を評価する方法	量的研究 (横断的かつ縦断的な事前事後テストの実験デザイン)	韓国の慶州の大学に通っている1年次~4年次の看護学生154人	自記式質問紙	記述・推測統計
	2	Choe, Kwisoan (2014)	看護学生のための生命倫理教育に対する構成主義的教授法の効果：準実験的研究	量的研究 (事前事後テストの準実験デザイン)	韓国人看護学生93人	自記式質問紙	記述・推測統計
	3	Sang Dol Kim (2014)	看護学生の倫理的価値に対する混合学習プログラムの効果	量的研究 (事前事後テストの実験デザイン)	K大学で看護倫理コースを受講していた看護学生71人	自記式質問紙	記述・推測統計
	4	Park, Eun-Jun (2015)	事例ベースのコンピュータプログラムの看護学生の倫理的意思決定に対する有効性	量的研究 (事前事後テストの準実験デザイン)	4つのコースの看護学生158人	自記式質問紙(オンライン)	記述・推測統計
	5	Hye-A Yeom (2017)	看護学生の倫理的感受性に対する倫理教育の効果	量的研究 (事前事後テストの準実験デザイン)	韓国のソウルにある大学に通っていた看護学生70人	自記式質問紙	記述・推測統計
アメリカ	6	Bartlett, Jennifer L. (2013)	倫理的能力の開発：看護専門教育課程の学士教育認定プログラムの展望	ミックス・メソッド・リサーチ(構成要素デザイン)	4つの州の看護教員128人	自記式質問紙、面接法	記述統計、コンテンツ分析、編集分析
	7	Krautscheid, Lorretta (2014)	看護学専攻学生のマイクロ倫理的意思決定：定性的調査	質的研究 (質的記述的研究デザイン)	大学のBSNプログラムに登録した看護学生7人	遂行の観察、面接法(1対1の半構造化インタビュー)	編集分析形式
	8	Smith, Gloria Copeland (2016)	看護学生の非倫理的な行動、ソーシャルメディア、年齢との関連	ミックス・メソッド・リサーチ(構成要素デザイン)	看護学生55人	自記式質問紙、面接法	記述・推測統計
	9	Krautscheid, Lorretta C. (2017)	看護学生の示したマイクロ倫理的ジレンマに対する葛藤対処	量的研究 (記述、パイロット研究)	看護学生59人	遂行の観察(ビデオ撮影)	記述統計
ベルギー	10	Cannaerts, N. (2014)	看護学生の倫理的能力への倫理教育の貢献：教育者と学生の認識	文献レビュー	1992年1月~2012年3月に発表された論文15本	電子データベース検索	比較・分類・関連づけ
	11	Vynckier, Tine (2015)	看護学生によって認識される倫理教育の有効性：新しい評価手段の開発とテスト	ミックス・メソッド・リサーチ(構成要素デザイン)	2つの大学の3年次看護学生86人	自記式質問紙	記述・推測統計
スウェーデン	12	Blomberg, Karin (2016)	倫理的推論の統合のための臨床的集団指導：学生と指導者からの見解	質的研究 (解釈的記述的研究デザイン)	看護教育の初年度に臨床実習に参加した看護学生12人と臨床指導者5人	面接法	解釈的記述
	13	Tuvsesson, Hanna (2017)	看護学生の道徳的感受性に関連した人口学的要因	量的研究 (相関関係的デザイン)	看護学生299人	自記式質問紙	記述・推測統計
オーストラリア	14	Willsher, Kerre A. (2013)	“Joanna”が遺したものの：看護師卒前教育に関する倫理的討議の意義	質的研究 (グループ比較タイプ、横断的、質的記述的研究デザイン)	看護学生20人と元看護師として雇用されていた中高年の退職者12人の2つの教育グループ。	発話思考法(ブレインストーミング)	グループ間の質的内容的比較、批判的分析
ブラジル	15	de Oliveira, Maria Liz Cunha (2014)	看護学部学生の視点から見た安楽死：概念と課題	質的研究 (ケース・スタディー型の記述的、探索的な質的研究デザイン)	生命倫理コースに登録した看護学生31人	発話思考法(グループ・ディスカッション)	コンテンツ分析
ニュージーランド	16	Sinclair, J. (2016)	臨床実習における看護学生の倫理的問題の経験	量的研究 (縦断的、定量的記述的研究デザイン)	看護学生373人	自記式質問紙	記述・推測統計
台湾	17	Chao, S-Y. (2017)	看護倫理学コースにおける統合Webベース教育モデルの開発、実施、および効果	ミックス・メソッド・リサーチ(トライアンギュレーションおよび事前事後テストの実験デザイン)	2年次の看護学生100人(実験群51人、対照群49人)	自記式質問紙	記述・推測統計

Table 3 研究目的別一覧

研究目的別の分類	文献NO	筆頭著者(発行年)	国	研究タイトル(和訳)	研究目的
看護学生および看護教員の看護倫理教育に関する現状認識の研究	6	Bartlett, JenniferL.(2013)	アメリカ	倫理的能力の開発:看護専門教育課程の学士教育認定プログラムの展望	倫理的能力の概念を説明し、学士課程のプログラムにおける倫理教育の統合および評価の現在の方法を説明する。
	10	Cannaerts,N.(2014)	ベルギー	看護学生の倫理的能力への倫理教育の貢献:教育者と学生の認識	看護学生の倫理的能力に対する倫理教育の貢献、看護学生および教育者の認識に関する文献をレビューする。
倫理的思考能力を育成するための倫理的議論に焦点をあてた研究	14	Willsher, KerreA.(2013)	オーストラリア	“Joanna”が遺したもの:看護師卒前教育に関する倫理的討議の意義	Joannaの事例を用いて批判的思考スキルを高め、教室での倫理的な議論を促す。
	15	de Oliveira, MariaLiz Cunha.(2014)	ブラジル	看護学部学生の視点から見た安楽死:概念と課題	大学の「専門的実践と生命倫理」コース受講前に、看護学生が安楽死について議論する。
	2	Choe, Kwisoan.(2014)	韓国	看護学生のための生命倫理教育に対する構成主義的教授法の効果:準実験的研究	看護学生の生命倫理的問題の認識、生命倫理的問題の経験、および倫理的能力の達成に対する2つの構成主義的な教授戦略の効果を比較する。
臨床実習に関する看護学生と臨床指導者の経験に焦点をあてた研究	12	Blomberg, Karin.(2016)	スウェーデン	倫理的推論の統合のための臨床的集団指導:学生と指導者からの見解	臨床的集団指導への参加に関連する看護学生の倫理的推論と指導者の経験を調査し記述する。
	16	Sinclair, J.(2016)	ニュージーランド	臨床実習における看護学生の倫理的問題の経験	所定の倫理的問題の頻度と対応する苦痛のレベルを調査する。
倫理的問題に直面した看護学生の対応を明らかにする研究	7	Krautscheid, Lorretta.(2014)	アメリカ	看護学専攻学生のマイクロ倫理的意思決定:定性的調査	実践環境でマイクロ倫理的臨床決定を下すことに直面している看護学生の経験を理解する。
	9	Krautscheid, Lorretta,C.(2017)	アメリカ	看護学生の示したマイクロ倫理的ジレンマに対する葛藤対処	マイクロ倫理的ジレンマを組み込んだシミュレーション演習における看護学生の葛藤対処の頻度を記述する。
ICTを取り入れた看護倫理教育の開発・実施・効果の検証に関する研究	3	Sang Dol Kim.(2014)	韓国	看護学生の倫理的価値に対する混合学習プログラムの効果	看護学生の倫理的価値に対する混合学習プログラムの効果を調査する。
	4	Park, Eun-Jun.(2015)	韓国	事例ベースのコンピュータプログラムの看護学生の倫理的意思決定に対する有効性	統合的な倫理的意思決定モデルを用いて、韓国の看護学生の倫理的意思決定能力について、事例ベースのコンピュータプログラムの有効性をテストする。
	17	Chao, S.-Y.(2017)	台湾	看護倫理学コースにおける統合Webベース教育モデルの開発、実施、および効果	倫理的意思決定を看護倫理学コースに統合し、このコースが看護学生の倫理的意思決定に及ぼす影響を評価する対話型状況eラーニングシステムを開発し実施する。
	5	Hye-A Yeom.(2017)	韓国	看護学生の倫理的感受性に対する倫理教育の効果	看護学生の倫理的感受性および批判的思考傾向に対する看護倫理教育の効果を検討する。
看護倫理教育の効果を測定するツールの開発に関する研究	1	MI-Aie Lee.(2013)	韓国	看護学生の道徳的判断の変化と倫理教育の効果を評価する方法	看護学士過程における看護学生の道徳的判断の変化を調査し、倫理教育を評価するための適切な方法を特定する。
	11	Vynckier, Tine.(2015)	ベルギー	看護学生によって認識される倫理教育の有効性:新しい評価手段の開発とテスト	「学生の倫理教育スケールの有効性の知覚」(SPEEES)と名付けたツールを開発し、倫理教育の有効性に対する看護学生の認識を測定し、知覚されたものを調査するため看護学生でパイロットスタディを実施する。
外的要因が看護学生の道徳的感受性や倫理的行動に及ぼす影響に関する研究	8	Smith, Gloria Copeland.(2016)	アメリカ	看護学生の非倫理的な行動、ソーシャルメディア、年齢との関連	ソーシャルメディアが看護学生に及ぼす影響を明らかにする。
	13	Tuvsesson, Hanna.(2017)	スウェーデン	看護学生の道徳的感受性に関連した人口学的要因	看護学生の人口統計学的特徴と道徳的感受性の関係を調査する

の7つに分類できた(Table3)。

以下、分類された7つの研究目的別に、研究の概要を記載する。

1) 看護学生および看護教員の看護倫理教育に関する現状認識の研究

看護学生および看護教員の看護倫理教育に関する現状認識の研究は、17本中2本(文献No.6、文献No.10)であった。文献No.6はアメリカの4つの州の看護教員128人を対象とし、ミックス・メソッド・リサーチにて調査を行った研究であり、文献No.10は、1992年1月～2012年3月に発表された15本の海外文献を対象とした文献レビューであった。各文献の研究結果を以下に記載する。

文献No.6の対象である看護教員の職位の内訳は、教授12.5%、准教授15.6%、助教授35.9%、講師6.3%、インストラクター21.9%、その他(非常勤講師、臨床インストラクター、名誉教授など)7.8%であった。対象者のうち、過去5年間に正式な看護倫理教育や訓練を受けていない者は23.4%、倫理研修を受けていない者は30.5%、倫理教育または研修を受けていない者は8.6%であったが、対象者らは看護学士課程教育、大学院教育、および看護師としての実践を通じて看護倫理に関する知識を得ていた。対象者の81.2%が、一般的な倫理教育は、彼らの教える教育コースの中に含まれていて、看護倫理に関する特定のコースは必要ないと感じていた。倫理的能力の定義に関しては、知識・技能・態度の側面から検討され、倫理的態度と倫理的行動の概念にまでおよび、看護師の日常的な実践を包含しているものではあったが定義には至らず、今後の課題になっていることが報告されていた。

文献No.10では、15本の文献を対象に文献検討がなされた、国の内訳はイギリス、アメリカ、台湾、韓国、イラン、カナダ、ベルギー、トルコ、フィンランド、オーストラリアの10か国であった。看護学士課程の倫理コースに関する学生と看護教員の認識に焦点をあてた研究、倫理教育における経験学習方法に関する研究などが

報告されていた。文献検討の結果、倫理教育は倫理的認識と内省的かつ分析的スキルの発達を促進すること、倫理理論と臨床実習による実践経験との組み合わせのカリキュラムは効果が高いことが報告されていた。しかし、倫理的行動の発達への貢献に関することはほとんど言及されていなかったと報告されていた。

2) 倫理的思考能力を育成するための倫理的議論に焦点をあてた研究

倫理的思考能力を育成するための倫理的議論に焦点をあてた研究は、17本中3本(文献No.14、文献No.15、文献No.2)であった。文献No.14は、看護学生と元看護師の中高年の2グループを対象とし、実在した患者の看護事例を用いて倫理的な議論の促進を目的とする研究であった。文献No.15は、看護学生を対象とし、安楽死について議論することを目的とした研究であった。文献No.2は、看護学生を対象とし、アクションラーニング(Action Learning、以下ALと略す)と反対尋問討議(Cross-Examination Debate、以下CEDと略す)の2つの教育方法の効果の比較を目的とした研究であった。各文献の研究結果を以下に記載する。

文献No.14の看護事例は、深刻な形態の二分脊椎で生まれた実在した新生児“Joanna”の看護事例であった。事例を紹介したのち、20人の看護学生グループと12人の元看護師の中高年グループ間で討議を行い、その内容を記述的に比較する質的研究であった。その結果、看護学生グループは、“Joanna”が積極的な治療よりも緩和ケアを受けるべきであり、“Joanna”の死を許すことが最善であると主張していた。一方、中高年グループは、“Joanna”には最初から積極的な治療をすべきだったと主張し、コミュニティからの適切なサポートがあれば、“Joanna”と彼女の家族は満足のいく人生を送れるのに、社会は十分な支援をしていないと強く主張したと報告されていた。2グループの意見は明確に対立していたと報告されていた。

文献No.15は、大学の「専門的实践と生命倫理」コースの受講前に、看護学生が安楽死につ

いて議論することを目的とした研究であった。コースに登録した看護学生31人を対象に、ケース・スタディー型の質的研究を行っていた。その結果、①安楽死に対する看護師の認識、②生命の終結に関する彼らの行動、③安楽死に対処する準備ができているという感覚と大学がそれらを準備するという期待、④安楽死に対する彼らの態度、⑤痛みと身体的外観のサブカテゴリーに分けられた安楽死そのもの、という5つのカテゴリーに分類されていた。大学の「専門的実践と生命倫理」コースで安楽死モジュールを構築し、権利の認識を広げることに役立つと報告されていた。

文献No.2は、ALとCEDの2つの教育方法の効果を比較することを目的とした量的研究であった。韓国人看護学生93人を対象に、ALとCEDの2グループに事前事後テストを実施する準実験的な方法で調査していた。結果は、看護学生の生命倫理の問題に対する認識がALとCED両方のグループで向上していた。知識に関しては、ALに参加した看護学生の方がCEDクラスの看護学生よりも向上していた。授業後、両方のグループの看護学生は、以前よりも生命倫理に関してより多くの経験と、質の高い指導を経験したことが示され、倫理的能力の向上がみられたと報告されていた。

3) 臨床実習に関する看護学生と臨床指導者の経験に焦点をあてた研究

臨床実習に関する看護学生と臨床指導者の経験に焦点をあてた研究は、17本中2本（文献No.12、文献No.16）であった。文献No.12は、臨床的集団指導（臨床実習モデルのこと）の取り組みを評価するプロジェクトの一部として行われ、看護学生と臨床指導者を対象に、看護学生の倫理的推論と臨床指導者の経験を調査することを目的とした研究であった。文献No.16は、看護学生を対象に、臨床実習中に生じる倫理的問題の頻度と苦痛のレベルについて調査した量的研究であった。各文献の研究結果を以下に記載する。

文献No.12は、臨床的集団指導に参加した看護学生12人と臨床指導者5人を対象に、インタ

ビュー調査による質的研究を行っていた。その結果、臨床的集団指導は、倫理的問題を孕んだ臨床状況に対する倫理的思考や議論を刺激することが明らかになっていた。また、看護師が患者に非倫理的な行為をする状況下では、看護学生が患者に対して思いやりの態度を示すことが報告されていた。

文献No.16は、ニュージーランドの看護学生373人を対象に、質問紙調査による縦断的な量的研究を行っていた。その結果、対象者の66%以上が、患者に関する守秘義務、プライバシーの尊重、尊厳の侵害を経験し、87%が安全でない労働条件を経験していた。最も悲惨な問題は、安全でない医療行為、労働条件、乱用または怠慢の疑いなど、患者の安全を損なう問題であった。自由回答形式の質問から抽出されたテーマには、サポートと監督の欠如、いじめと終末期の問題が含まれていた。倫理的問題が発生する頻度が3年次の参加者で最も高いことがわかったが、3年次後半になると苦痛レベルは低かったと報告されていた。

4) 倫理的問題に直面した看護学生の対応を明らかにする研究

倫理的問題に直面した看護学生の対応を明らかにする研究は、17本中2本（文献No.7、文献No.9）であり、特定のシミュレーション下で看護学生がどのような反応を示すかを調査していた。以下に各文献の研究結果を記載する。

文献No.7は、実践環境でミクロ倫理的臨床決定を下すことに直面している看護学生の経験を理解することを目的とした研究であった。「ミクロ倫理」とは、個人レベルの意思決定を意味し、「マクロ倫理」は、集団またはグループレベル（公共政策または組織政策など）の意思決定を意味している（Worthley, 1998）。看護学生7人を対象に、行動観察と1対1の半構造化面接を行い、質的研究を行っていた。本物そっくりの臨床環境と模擬患者、模擬看護師を配置し、倫理的ジレンマを引き起こす要素を組み込んだシミュレーション下で、看護学生がどのように対応するのか観察し分析する方法を取り入れてい

た。その結果、看護学生は、学校で教わった最善の行為と、臨床環境での行為が矛盾しているという道徳的不均衡を感じていながら、模擬看護師の助言に従い行為をしたと報告されていた。

文献No.9は、「高忠実度シミュレーション：High-fidelity simulation（以下HFSと略す）」というシナリオに埋め込まれたマイクロ倫理的ジレンマに遭遇した看護学生が示した、葛藤対処の頻度を記述することを目的とした研究であった。看護学生59人を対象とし、シミュレーション実験を用いた量的研究を行っていた。葛藤対処の分類は、Thomas and Kilmann（1978）の5つの葛藤対処スタイルを用いていた。結果は、59人中33人の看護学生が「協力」「妥協」という効果的な葛藤対処を示し、17人の看護学生は、「回避」「競合」「順応」という効果のない葛藤対処を示していた。9人の学生は、疑わしい看護実践に気づけなかったと報告されていた。

5) ICTを取り入れた看護倫理教育の開発・実施・効果の検証に関する研究

ICTを取り入れた看護倫理教育の開発・実施・効果の検証に関する研究は、17本中4本（文献No.3、文献No.4、文献No.17、文献No.5）であった。看護学生を対象に、ICTでの看護倫理教育を開発導入し、その効果を検証する研究であった。各文献の研究結果を以下に記載する。

文献No.3は、看護学生の倫理的価値に対する混合学習プログラムの効果を調査することを目的とした量的研究であった。看護倫理コースを受講していた看護学生71人を対象に、オンラインでの事例ベース学習と、オフラインでの問題解決学習を混合した、混合学習プログラム受講前後の変化をみる実験研究を行っていた。その結果、対象者の倫理的価値観のスコアは混合学習後 3.6 ± 0.27 点で混合学習前 3.4 ± 0.32 点に比べて有意に高かった（ $p=0.004$ ）。混合学習後、対象者の倫理的価値観のサブ領域別評価は、人間の生命の領域、パートナー関係の領域、看護業務領域が混合学習前に比べてそれぞれ有意に

高く現れ（ $p=0.034$ ； $p<0.001$ ； $p<0.001$ ）、対象者の関係の領域は有意に低かった（ $p<0.001$ ）。混合学習プログラムは教育プログラムとして特定されたと報告されていた。

文献No.4は、統合的な倫理的意思決定モデルを用いて、韓国の看護学生の倫理的意思決定能力について、事例ベースのコンピュータープログラムの有効性をテストすることを目的とした量的研究であった。異なる大学の看護倫理コースの2年生（77人）2コースと4年生（81人）2コースの合計158人を対象に、非同等のコントロールグループに事例ベースのコンピュータープログラムを受講してもらい、その事前テストと事後テストを比較する、実験研究を行っていた。その結果、倫理学コースの補完的なツールとして事例ベースのコンピュータープログラムを使用することは、看護学生の倫理的準備およびコースに対する満足度を向上させることが明らかになったと報告されていた。

文献No.17は、倫理的意思決定を看護倫理コースに統合し、看護学生の倫理的意思決定能力に対するこのコースの効果を評価するためのeラーニングシステムを開発し評価することを目的としたミックス・メソッド・リサーチであった。2年次の看護学生100人を対象に、第1段階でeラーニングシステムの開発、第2段階で事前事後テストの実験研究を行っていた。その結果、第1段階で開発されたeラーニングシステムは看護倫理コースに統合され、コース終了後、実験群の看護学生は対照群の看護学生よりも、倫理的意思決定能力の大幅な向上を示していた。また、実験群の看護学生は対照群の看護学生よりも、関与する人々の価値観や視点の違いを認識する能力に優位性を示したと報告されていた。

文献No.5は、看護学生の倫理的感受性および批判的思考傾向（事実と証拠に基づいた合理的な行動方針につながる論理的な考え方）に対する看護倫理教育の効果を検討することを目的とした研究であった。看護倫理コースを受講する看護学生70人を対象に、コース受講前後でアン

ケート調査を実施する量的研究を行っていた。その結果、教育後の道徳的感受性および批判的思考傾向の全体的なスコアに有意な変化はみられなかった。患者志向のケアのレベルは5.71から5.88に増加し、好奇心のレベルは介入後3.54から3.66に増加していた。看護倫理教育の効果は、両親と同居する変数と関連し、独立して生活していた看護学生は、両親と同居している学生と比べ、道徳的感度スコアの増加を示していた ($p = .021$)。ベースラインでの道徳的感受性と批判的思考の傾向 ($p = .007$) の間には、有意な正の相関がみられた。道徳的感受性と批判的思考傾向も介入後有意に相関していた ($p = .001$) と報告されていた。

6) 看護倫理教育の効果を測定するツールの開発に関する研究

看護倫理教育の効果を測定するツールの開発に関する研究は、17本中2本(文献No.1、文献No.11)であった。

文献No.1は、看護学士過程における看護学生の道徳的判断の変化を調査し、倫理教育を評価するためのより適切な方法を特定することを目的とした研究であり、1年次～4年次の看護学生154人を対象に、横断的、縦断的な量的研究を行っていた。その結果、学年間の道徳的判断力の違いは、P (%) スコア(高いほど道徳的判断力が高い)が平均47.11で2年次が最も高く、3年次が最も低かった。4つのレベルスコア(高いほど社会の秩序を尊重する方向で意思決定を下す)は平均14.22で2年次が最も低く、4年次が最も高かった。4年間の道徳的判断力の変化は、P (%) スコアが平均42.80で対象者が4年次のときに40.64で最も低く、1年次の時は47.04で最も高かった。4つのレベルスコアは平均16.67で、1年次のときに14.39だったスコアが4年次の時は18.28で、学年が上がるにつれ着実に上昇した。また、時間の流れに沿った4つのレベルスコアとP (%) スコアの間に交互作用はないことが分かった ($F = 1.93, p = .128$)。非同等の対照群の研究では、看護倫理教育の有効性はP (%) スコアのみによって識別され、

倫理教育の効果を評価するためにP (%) スコアだけを測定して評価した既存の方法の方が、4つのレベル評価を測定し評価する方法に比べ、より有用であったと報告されていた。

文献No.11は、「学生の倫理教育スケールの有効性の知覚: the 'Students' Perceived Effectiveness of Ethics Education Scale' (以下SPEEESとする)」と名付けられた有効で信頼できる道具を開発し、倫理教育の有効性に対する看護学生の認識を測定し、そして知覚されたものを調査することを目的とした研究であった。2つの大学の3年次の看護学生86人を対象に、量的研究を行っていた。その結果、SPEEESのわかりやすさと使いやすさは優良と示されていた。看護学生は、「ケース・スタディー」「講義」「対話的指導」が効果的な教育方法であり、「自分の価値観を批判的に振り返る」という倫理的能力の促進を認識していた。しかし、他の倫理的能力に関する倫理教育の有効性についての看護学生の認識は、両方の学校間で大きな違いを明らかにしていたと報告されていた。

7) 外的要因が看護学生の道徳的感受性や倫理的行動に及ぼす影響に関する研究

外的要因が看護学生の道徳的感受性や倫理的行動に及ぼす影響に関する研究は、17本中2本(文献No.8、文献No.13)であった。外的要因には、ソーシャルメディアや人口学的要素が取り上げられていた。各文献の研究結果を以下に記載する。

文献No.8は、ソーシャルメディアが看護学生の倫理的行動に及ぼす影響を明らかにすることを目的としたミックス・メソッド・リサーチ研究であった。看護学生55人を対象に、質問紙調査を行っていた。その結果、看護学生の非倫理的な行動とソーシャルメディアの使用は有意な相関を示していた。年代および臨床コホートによる学生の非倫理的行動との有意差が示されていた。2学期の看護学生は、他の学期の看護学生よりも平均年齢が高いコホートであったことで、1学期、3学期、4学期の看護学生よりも非

倫理的な行動が少なかったと報告されていた。文献No.13は、看護学生の人口統計学的特徴と道徳的感受性の関係を調査することを目的とした量的研究であった。看護学生299人を対象に、質問紙調査を行っていた。その結果、性別、年齢、親の状態が、看護学生の道徳的感受性に関連していることが示されていた。学年は道徳的感受性とは無関係であることが明らかになったと報告されていた。

4. 倫理的に行為する能力の獲得に関連する研究

倫理的に行為する能力の獲得に関連する研究論文は、17本中、前述した文献No.7、文献No.9であった。

文献No.7、文献No.9は、模擬患者と模擬看護師のいる本物そっくりの臨床環境を設定し、マイクロ倫理的意思決定を迫られるシミュレーション下で学生がどう判断し行動するかを調査した研究であった。2つの研究の共通点は、“看護学生がマイクロ倫理的ジレンマに遭遇する”という設定であった。文献No.7で用いられたシミュレーションの概要を示すと、「看護学生は心不全患者（に扮した役者）に降圧剤と利尿剤を服薬させるのだが、その最中、患者に深刻な電話が掛かってきて、感情的になった患者が服薬を中断したいと申し出る。そこにはスタッフ看護師（に扮した役者）もいて助言を受けられる。そうした場合、学生はどう対応するのか。」といった内容であった。このシミュレーションを用いて、文献No.7は倫理的ジレンマに対する看護学生の判断基準や内面を調査し、その結果、学校で教わった倫理原則を臨床判断に活かすことができなかったことを明らかにしていた。また、文献No.9は、文献No.7の研究結果を基にHFS(高忠実度シミュレーション)を作成し、看護学生の対処行動を「協力」「妥協」「競合」「順応」「回避」の5つの葛藤対処のスタイルに分類し頻度を明らかにすることで、よりHFSを洗練していくために行ったパイロット研究であった。この研究に参加した看護学生

は、日常的な看護実践に伴うマイクロ倫理的ジレンマに対処する準備ができていないと感じていたと報告されていた。文献No.9で用いられた詳しいシミュレーション内容を記載した部分は見当たらなかった。

IV. 考察

1. 海外における看護倫理教育に関する研究の動向および日本の看護倫理教育への活用の可能性と課題

アメリカでは倫理的能力に関する概念分析(Kulju, Kati; Stolt, Minna; Suhonen, Riitta; Leino-Kilpi, Helena, 2016)、倫理的能力に関する統合レビュー(Lechasseur, Kathleen; Caux, Chantal; Dollé, Stéphanie; Legault, Alain, 2018)など、倫理的能力の定義に向けて研究が継続されている。Kulju, Kati; Stolt, Minna; Suhonen, Riitta; Leino-Kilpi, Helena, (2016)によると、この概念がケアの質の向上に不可欠な概念であるにも関わらず、医療専門家の倫理的専門知識、行動の側面をカバーする包括的な定義がまだないからであると述べている。加えて、Lechasseur, Kathleen; Caux, Chantal; Dollé, Stéphanie; Legault, Alain, (2018)は、倫理的能力という概念は、倫理的感受性、倫理的知識、倫理的考察、倫理的意思決定、倫理的行動、および倫理的態度などの用語を包括する、看護実践における非常に高い能力を表していると述べている。このことから、看護実践の基本的な構成要素である倫理を、看護教育カリキュラムに統合するためには、倫理的能力の明確化が重要な課題となるのだと考えられる

一方、日本では、倫理的感受性、道徳的推論、倫理的意思決定などの定義づけは、多くの研究者によってなされているが、それらを包括する意味において倫理的能力を定義した研究は見当たらない。しかし、日本でも、「看護学教育モデル・コア・カリキュラム(文部科学省, 2017A)」において、看護専門職としての高い倫理性を求められており、どの看護系大学に

においても、看護倫理教育の方法についての探求がなされている現在、いずれはアメリカと同様に、看護教育カリキュラムに看護倫理教育が統合される際、倫理的能力の明確化が課題となってくるであろうと考える。

また、韓国と台湾ではICTを活用した看護倫理教育の開発が盛んに行われている(文献No.8, 文献No.9, 文献No.10, 文献No.11)。これらの研究では、学生の倫理的準備および看護倫理コースに対する満足度、倫理的推論能力、患者志向のケア、道徳的感受性および探求心、批判的思考傾向の向上を認め、良い成果を得ている。Park, Eun-Jun; Park, Mihyun(2015)は、ICTの導入は、授業時間を増やすことなく、学生の学習を補完する自習ツールとして使用できるメリットがあると述べている。日本でも、「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会の最終報告(文部科学省, 2011)」において、「情報リテラシー：情報通信技術(ICT)を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。」と示され、学士課程で培われる汎用的技能としている。これ以前からも、様々な大学でeラーニングを活用して履修の機会を確保する取り組みが行われてきたが、今のところ韓国や台湾に見られるように、ICTを積極的に学士課程における看護倫理教育に組み込んだ研究報告は見当たらない。今後、看護倫理教育におけるICTの活用は、日本でも課題とされることが考えられるが、注意すべき点は、韓国や台湾の結果でも分かるように、あくまでも倫理的推論、道徳的感受性、批判的思考傾向などといった倫理的な思考の側面の向上が期待できるということであり、複雑な要素の絡み合う臨床環境に置かれ倫理的問題に直面した場合、様々な視点から状況判断し、実際に倫理的な行動ができるかというところまではカバーできないと考える。したがって、ICT教育を活用する場合は、文献No.7と文献No.9のようなシミュレーション教育や、文献No.12の「臨床的集団指導」といった臨床実習モデルなど、行動学習理論や経験に基づいた

学習を組み合わせる必要があるだろうと考える。

また、韓国ではALとCEDの2つの教授戦略を比較する研究(文献No.2)を行っている。ALとCEDどちらの教育戦略も倫理的な意思決定やその他の倫理的行動を促進するために、看護学生に生命倫理を教えるための有用な方法になる可能性があると考えられる。ただし、ALについての詳細な方法の記載が見あたらないことと、知識について、ALの学生のほうがCEDの学生よりも向上したとあるが、その理由についての言及はなかった。CEDという戦略は、日本では、“ディベート”という言葉で検索すると1990年代から論文が抽出される。

ディベートとは、論題に対し、肯定側と否定側に分かれ、一定のルールに従って議論し、最後に聴衆によって説得力の勝敗が判定されるという形式をとる(宮脇ら, 1999)。安酸(1991)は、「日本人はディベートや議論は苦手であるが、相対する意見の衝突、特に倫理的な問題に対する意見の衝突にどのように対処するかは、現場で働く看護婦にとって重要な、現実的な課題である。(中略)議論をして他の人は違う意見を持っているという事実を繰り返し直面することによって、学生は認知的に発達し、道徳的な理由付けにおいても成長する。」と述べており、看護学生への倫理教育におけるディベートの活用は、必要かつ効果的であると考えられる。

しかし、ディベートにはデメリットがある。川島(1992)は、「本音は否定論者であるのに肯定論者に分けられると葛藤が生じるものであるが、論題に対する情報収集を進めていく過程で肯定論者へ感情移入し、次第に否定論的な思いが薄れ、本音の立場から肯定論に変化した人もいた。“その立場に立つ”ということが、根本的な哲学までも変えてしまう。ディベートがそこまで求めるべきであろうか。(中略)やりっ放しや形だけのディベートを実施することはかえって危険である。ディベート終了後の評価はとても大切であり、正しいディベートの目

的と方法を熟知した指導と評価を行わなくてはならない。」と述べている。「看護学教育モデル・コア・カリキュラム(文部科学省, 2017b)」では、看護系人材として求められる基本的な資質・能力に、「根拠に基づいた課題対応能力：未知の課題に対して、自ら幅広く多様な情報を収集し、創造性の発揮と倫理的・道徳的な判断及び科学的根拠の選択によって課題解決に向けた対応につなげる。」と述べられており、こうした人材の育成に應えるためには、シミュレーション教育や臨床実習における倫理的な学びの他にも、デメリットへの対策を考えた上で、ディベート方式を取り入れる教育戦略も、より効果的である可能性が考えられる。

2. 倫理的に行為する能力の獲得に向けて日本の看護倫理教育に取り入れられる可能性

文献No.7と文献No.9で示された結果では、看護学生は倫理原則を臨床的判断に統合することができないこと、日常的な看護実践に伴うマイクロ倫理的ジレンマに対処する準備ができていないことなどが報告されていた。倫理的問題に対して行為する能力の獲得は、知識や分析手法を教わっただけでは困難である。課題に関わっている人々の、立場、考え、価値観、信念、置かれている状況、環境、規則、そのほか様々な角度から課題を捉え、対応策を練り、現実的に行動に移していく必要がある。そのためには、実際にその状況に身を置いてみなければ分からないことの方が多し。その学びの機会となるものとして、行動学習理論や経験に基づいた学習の組み合わせが必要不可欠なものであると考える。文献No.7では、行動学習理論によって導かれる教育戦略を組み込む必要性と、看護師は何をすべきかを知ることと、自分の信念に基づいて行動することの一致を促進できるようなシミュレーションの活用が必要であると述べられている。シミュレーション演習や臨床実習での体験を通じて、倫理的に行為する能力の獲得に結びつけていく方法は効果的である可能性が考えられる。

V. 結論

CINAHL with Full text(web版)を使用し、2013年～2017年の過去5年間に発表された17本の論文を対象に、海外における看護倫理教育の動向から、倫理的に行為する能力の獲得に関連する示唆を得る目的で調査した。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 研究目的別に分類すると、①倫理教育の貢献と看護教員の看護倫理教育に関する現状認識の研究。②倫理的思考能力を育成するための倫理的議論に焦点をあてた研究。③臨床実習に関する看護学生と臨床指導者の経験に焦点をあてた研究。④倫理的問題に直面した看護学生の対応を明らかにする研究。⑤ICT(情報通信技術)を取り入れた看護倫理教育の開発・実施・効果の検証に関する研究。⑥看護倫理教育に活かした臨床実習モデルの開発に関する研究。⑦看護倫理教育の効果を測定するツールの開発に関する研究。⑧外的要因が看護学生の道徳的感受性や倫理的行動に及ぼす影響に関する研究。⑨臨床実習における看護学生の倫理的問題に関する研究の7つの分野の研究が行われていた。

2. 倫理的に行為する能力の獲得に関連する研究は2本であった。

本研究の限界と課題は、検索データベースをCINAHL with Full text(web版)に絞ったことにある。他のデータベースも検索すれば、より多様な論文を抽出できた可能性がある。また、国別の背景(看護倫理教育の変遷、学士課程の教育カリキュラム、人種、宗教等)についての情報を加味して分析していない。国別の背景を調べることで、より多角的に海外の動向を知ることができた可能性がある。今後はこれらの調査を進め、新たな知見を得て、倫理的能力の向上に貢献できる倫理教育の開発に役立てていきたいと考えている。

VI. 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

(本研究は、東邦大学健康科学部特別研究助成を受けて2018年に実施したものである)

分析対象文献

文献No.1) Lee, M.-A. (2013). Changes in Nursing Students' Moral Judgment and Ways to Evaluate the Effect of Ethics Education. *Journal of Korean Academy of Nursing Administration*, 19(3), 351–360. <https://doi.org/10.1111/jkana.2013.19.3.351>

文献No.2) Choe, K., Park, S., & Yoo, S. Y. (2014). Effects of constructivist teaching methods on bioethics education for nursing students: A quasi-experimental study. *Nurse Education Today*, 34(5), 848–853. <https://doi.org/10.1016/j.nedt.2013.09.012>

文献No.3) Kim, S. D. (2014). Effects of a Blended Learning Program on Ethical Values in Undergraduate Nursing Students. *Journal of Korean Academy of Nursing Administration*, 20(5), 567–575. <https://doi.org/10.1111/jkana.2014.20.5.567>

文献No.4) Park, E.-J., & Park, M. (2015). Effectiveness of a Case-Based Computer Program on Students' Ethical Decision Making. *Journal of Nursing Education*, 54(11), 633–640. <https://doi.org/10.3928/01484834-20151016-04>

文献No.5) Yeom, H.-A., Ahn, S.-H., & Kim, S.-J. (2017). Effects of ethics education on moral sensitivity of nursing students. *Nursing Ethics*, 24(6), 644–652. <https://doi.org/10.1177/0969733015622060>

文献No.6) Bartlett, J. L. (2013). Developing ethical competence: The perspective of nurse educators from pre-licensure baccalaureate nursing programs accredited by the Commission on Collegiate Nursing Education. [University of Nevada, Las Vegas]. In *Developing Ethical Competence: The Perspective of Nurse Educators From Pre-licensure Baccalaureate Nursing Programs Accredited by the Commission on Collegiate Nursing Education*. <http://search.ebscohost.com/login.aspx?direct=true&db=c8h&AN=109864949&lang=ja&sitw=ehost-live>

文献No.7) Krautscheid, L., & Brown, M. (2014). Microethical Decision Making Among Baccalaureate Nursing Students: A Qualitative Investigation. *Journal of Nursing Education*, 53(3S), S19–S25. <https://doi.org/10.3928/01484834-20140211-05>

文献No.8) Smith, G. C., & Knudson, T. K. (2016). Student nurses' unethical behavior, social media, and year of birth. *Nursing Ethics*, 23(8), 910–918. <https://doi.org/10.1177/0969733015590009>

文献No.9) Krautscheid, L. C., Luebbering, C. M., & Krautscheid, B. A. (2017). Conflict-Handling Styles Demonstrated by Nursing Students in Response to Microethical Dilemmas. *Nursing Education Perspectives (Wolters Kluwer Health)*, 38(3), 143–145. <https://doi.org/10.1097/01.NEP.0000000000000132>

文献No.10) Cannaearts, N., Gastmans, C., & Casterlé, B. D. de. (2014). Contribution of ethics education to the ethical competence of nursing students: Educators' and students' perceptions. *Nursing Ethics*, 21(8), 861–878. <https://doi.org/10.1177/0969733014523166>

文献No.11) Vynckier, T., Gastmans, C., Cannaearts, N., & de Casterlé, B. D. (2015). Effectiveness of ethics education as perceived by nursing students: Development and testing of a novel assessment instrument. *Nursing Ethics*, 22(3), 287–306. <https://doi.org/10.1177/0969733014538888>

文献No.12) Blomberg, K., & Bisholt, B. (2016). Clinical group supervision for integrating ethical reasoning. *Nursing*

- Ethics, 23(7), 761–769. <https://doi.org/10.1177/0969733015583184>
- 文献No.13) Tuvesson, H., & Lützn, K. (2017). Demographic factors associated with moral sensitivity among nursing students. *Nursing Ethics*, 24(7), 847–855. <https://doi.org/10.1177/0969733015626602>
- 文献No.14) Willsher, K. A. (2013). The legacy of “Joanna”: The role of ethical debate in nurse preparation. *Nurse Education Today*, 33(4), 384–387. <https://doi.org/10.1016/j.nedt.2013.01.019>
- 文献No.15) de Oliveira, M. L. C., de Oliveira Cavalcanti, E., Alves, V. P., & da Silva, A. C. (2014). EUTHANASIA FROM THE PERSPECTIVE OF NURSING UNDERGRADUATE STUDENTS: CONCEPTS AND CHALLENGES. *Revista Mineira de Enfermagem*, 18(1), 134–141. <https://doi.org/10.5935/1415-2762.20140010>
- 文献No.16) Sinclair, J., Papps, E., & Marshall, B. (2016). Nursing students’ experiences of ethical issues in clinical practice: A New Zealand study. *Nurse Education in Practice*, 17, 1–7. <https://doi.org/10.1016/j.nepr.2016.01.005>
- 文献No.17) Chao, S.-Y., Chang, Y.-C., Yang, S. C., & Clark, M. J. (2017). Development, implementation, and effects of an integrated web-based teaching model in a nursing ethics course. *Nurse Education Today*, 55, 31–37. <https://doi.org/10.1016/j.nedt.2017.04.011>
- 引用文献**
- Gallagher, A. (2006/2008) 第16章看護倫理の教育：倫理的能力の促進，小西恵美子(監訳)，看護倫理を教える・学ぶ倫理教育の視点と方法 (pp188-206) .日本看護協会出版社.
- 橋本和子, 平瀬節子, 野村 晴香(2008): 日本における看護倫理の動向 医学中央雑誌web版によるキーワード検索をとおして. 看護・保健科学研究, 8巻, 1号, 57-62.
- 川島みどり (1992) : 「脳死」をめぐる公開ディベートを実施して. 看護教育, 33巻, 8号, 571-573.
- 小島操子(1998): 看護倫理：看護教員としてこう考える. *Quality Nursing* vol.4, no.1, 4-8.
- Kulju, K., Stolt, M., Suhonen, R., & Leino-Kilpi, H. (2016). Ethical competence. *Nursing Ethics*, 23(4), 401–412. <https://doi.org/10.1177/0969733014567025>
- Lechasseur, K., Caux, C., Dollé, S., & Legault, A. (2018). Ethical competence: An integrative review. *Nursing Ethics*, 25(6), 694–706. <https://doi.org/10.1177/0969733016667773>
- 宮脇美保子, 宮林郁子, 吉持智恵 (1999) : 看護倫理教育における教育方法の検討ーディベートの教育効果についてー. 鳥取大学医療技術短期大学部紀要, 第31号, 56-64.
- 文部科学省(2011) : 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告. 参考資料. 中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」(平成20年12月)(抄). 各専攻分野を通じて培う学士力～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～.
- 文部科学省(2017) : 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の習得を目指した学修目標～. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. p3.
- 文部科学省(2017) : 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の習得を目指した学修目標～. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. p11.
- 鈴木恵理子(2015): 看護基礎教育における「看護倫理」教育に関する現状と課題-5年間の文献検討から-. 淑徳大学看護栄養学部紀要, J. S.Nrsg.ShukutokuU Extra Number, 1-8.
- Thomas, K., & Kilmann, R. (1978) :

Comparison of four instruments measuring conflict behavior. *Psychologica Reports*, 42, 1139-1145.

Worthley John Abbott.(1998): *The Ethics of the Ordinary in Health Care: Concepts and Cases* .*HEC Forum* 10(2), 222-224.

安酸史子 (1991) : 学生の意思決定能力を促進する教育—*JNE (Journal of Nursing Education)* 29巻 (1990年) 4号から5号の途中までの概要. *看護教育*, 32巻, 1号,58-61.

吉岡詠美(2016):看護基礎教育課程における学生の倫理的能力に関する教育の現状と課題-2007年～2015年に発表された文献の分析-. *武蔵野大学看護学研究所紀要*,10号, 55-63.

Research trend in nursing ethics education for nursing students
in other countries :
A study focusing on acquiring the ability to engage in ethical practice

Toshimi SUZUKI

Toho University

Purpose: This study aimed to investigate the trend of research in nursing ethics education provided for nursing students in other countries, and obtain suggestions on how such research can be used in nursing ethics education in Japan for students to acquire the ability to engage in ethical practice. **Methods:** Using CINAHL with Full Text (web version), we searched for articles published between 2013 and 2017 and those including all of the following keywords: “ethics education”, “nursing”, and “under graduate”. **Results:** A total of 17 articles were extracted. They were divided into the following 7 categories according to the research purpose: (1) Studies on nursing students’ and teachers’ awareness regarding nursing ethics education, (2) research focused on ethical discussions aimed at fostering ethical thinking skills, (3) a study focusing on the experience of nursing students and clinical supervisors in clinical practice, (4) research to clarify the response of nursing students facing ethical problems, (5) studies on development, implementation, and verification of the effect of nursing ethics education by incorporating information and communications technology, (6) studies on development of a tool to measure the effect of nursing ethics education, (7) studies on the effect of external factors on moral sensitivity and ethical behavior of nursing students. There were 2 studies on acquiring the ability to engage in ethical practice.

Key words ethics education, nursing, undergraduate, nursing ethics, literature review